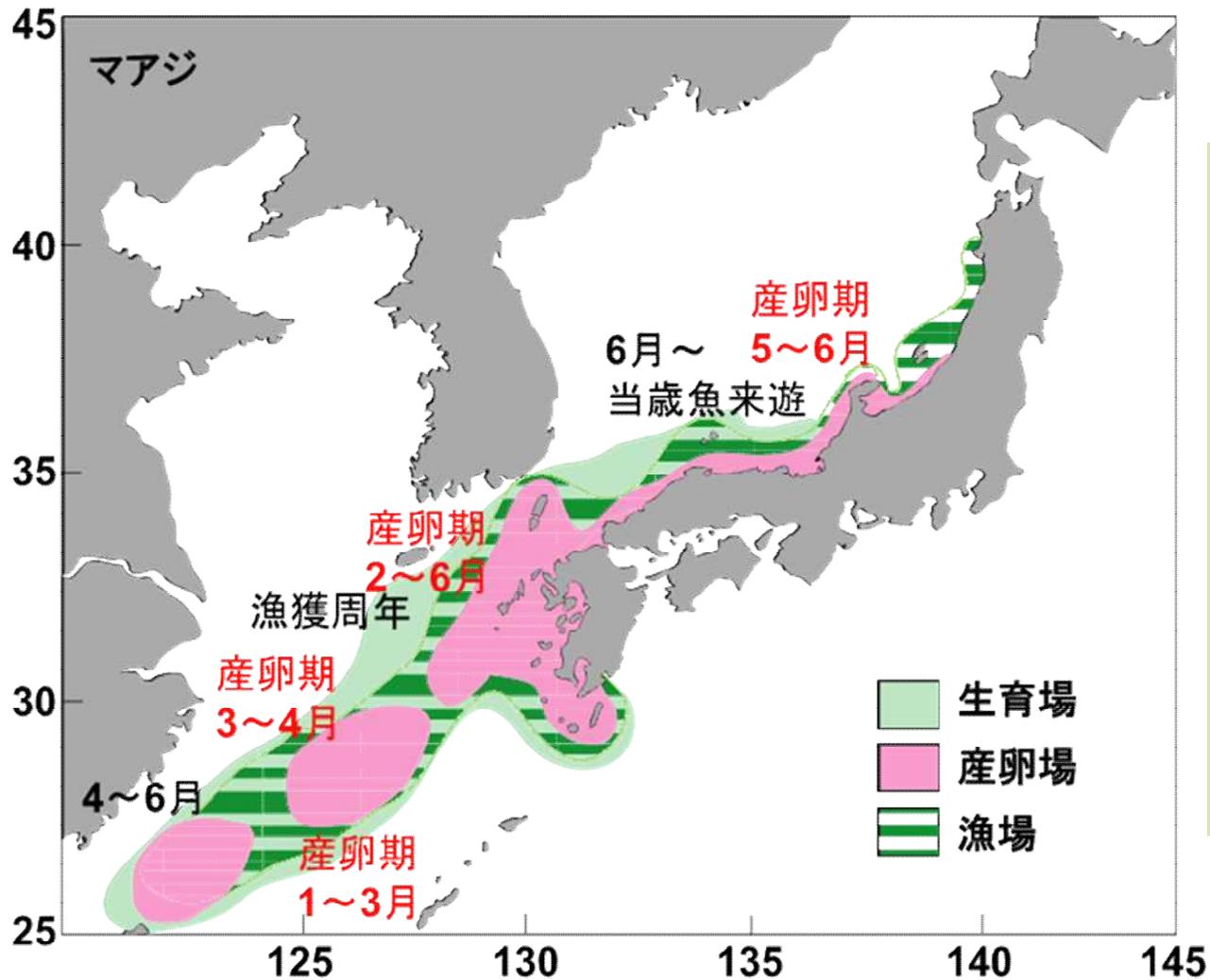




マアジ

平成30年度資源評価結果

# 生物学的特性(対馬暖流系群)



## 生物学的特性

- 寿命: 5歳程度
- 成熟開始年齢: 1歳(50%)、2歳(100%)
- 産卵期・産卵場: 1~6月、南部ほど早い傾向があり、盛期は3~5月、東シナ海南部、九州・山陰沿岸~日本海北部沿岸
- 食性: 仔魚期にはカイアシ類などの動物プランクトン、成魚期には動物プランクトンと珪藻類などの植物プランクトン
- 捕食者: 稚幼魚はブリ等の魚食性魚類

- 漁獲はほぼ周年
- まき網による漁獲が約80%

# 資源評価の流れ

## ① 資源診断

年齢別・年別漁獲尾数  
資源量指数

チューニングVPA、自然死亡係数Mは0.5を仮定

年齢別・年別資源尾数  
年齢別・年別漁獲係数

2018年以降の年齢別・年  
別資源尾数・親魚量

2018年の新規加入量の仮定  
(2018年親魚量と2007~2016年RPS中央値  
から算出)

2018年のFは $F_{current}$  (2017年のF) を仮定

## ② 将来予測

2019年以降の年齢  
別・年別資源尾数・  
親魚量

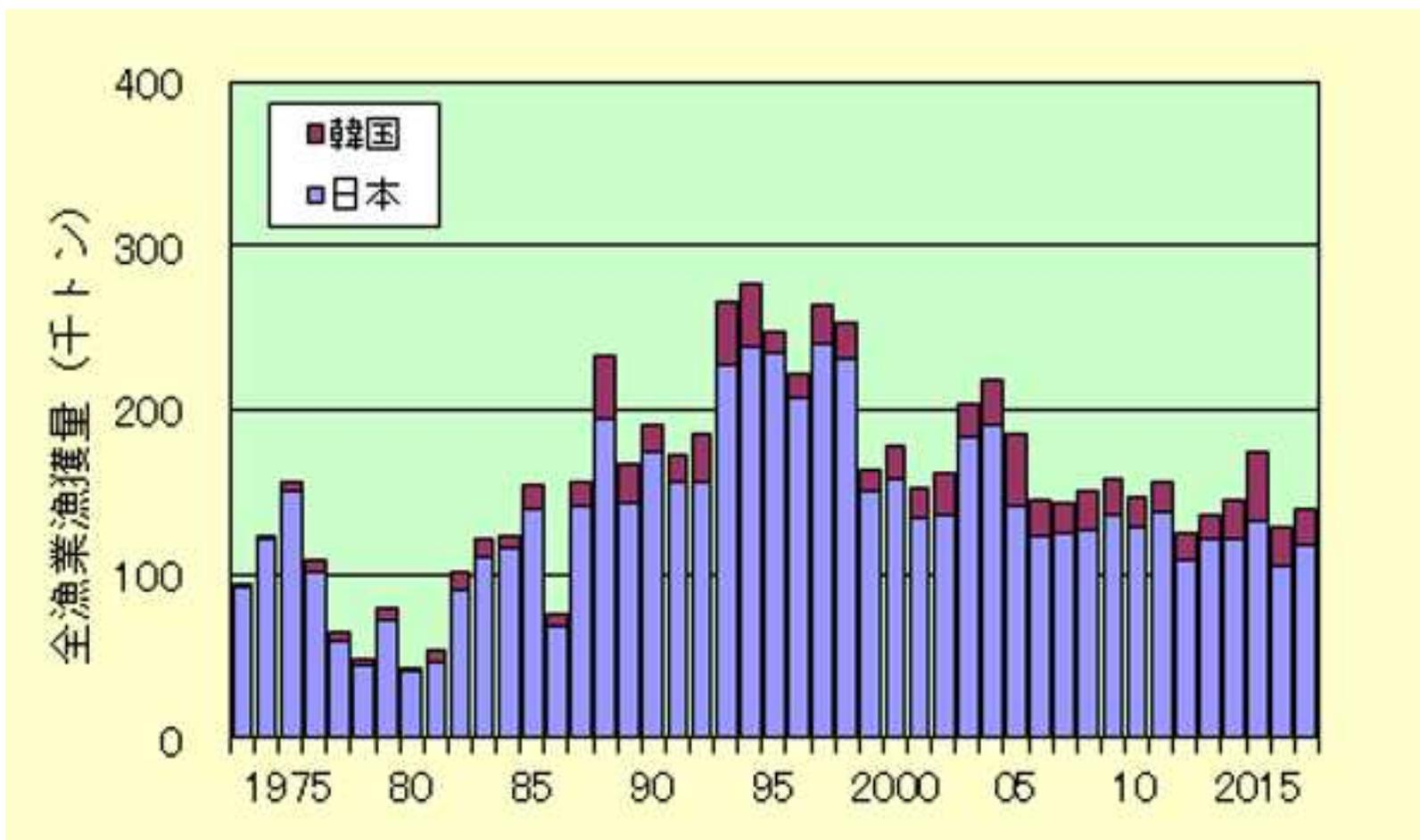
2019年以降の新規加入量の仮定 (将来  
予測における年々の親魚量と経験的な  
RPS値から算出)

漁獲シナリオとの対応

2019年のABC・算定漁獲量

## ③ ABC算定

# 漁獲の動向(対馬暖流系群)

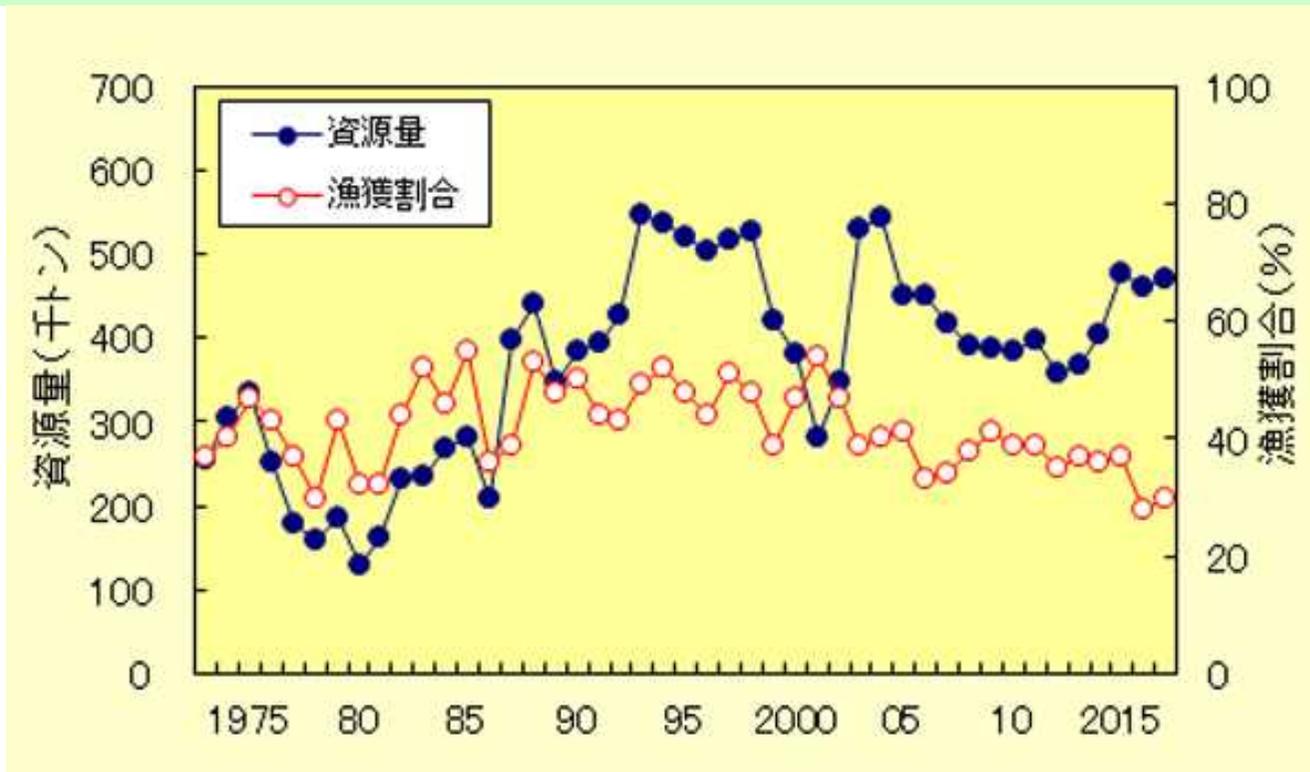


2017年の漁獲量

日本:11.8万トン 韓国:2.1万トン

計:13.9万トン 中国の漁獲は含まない

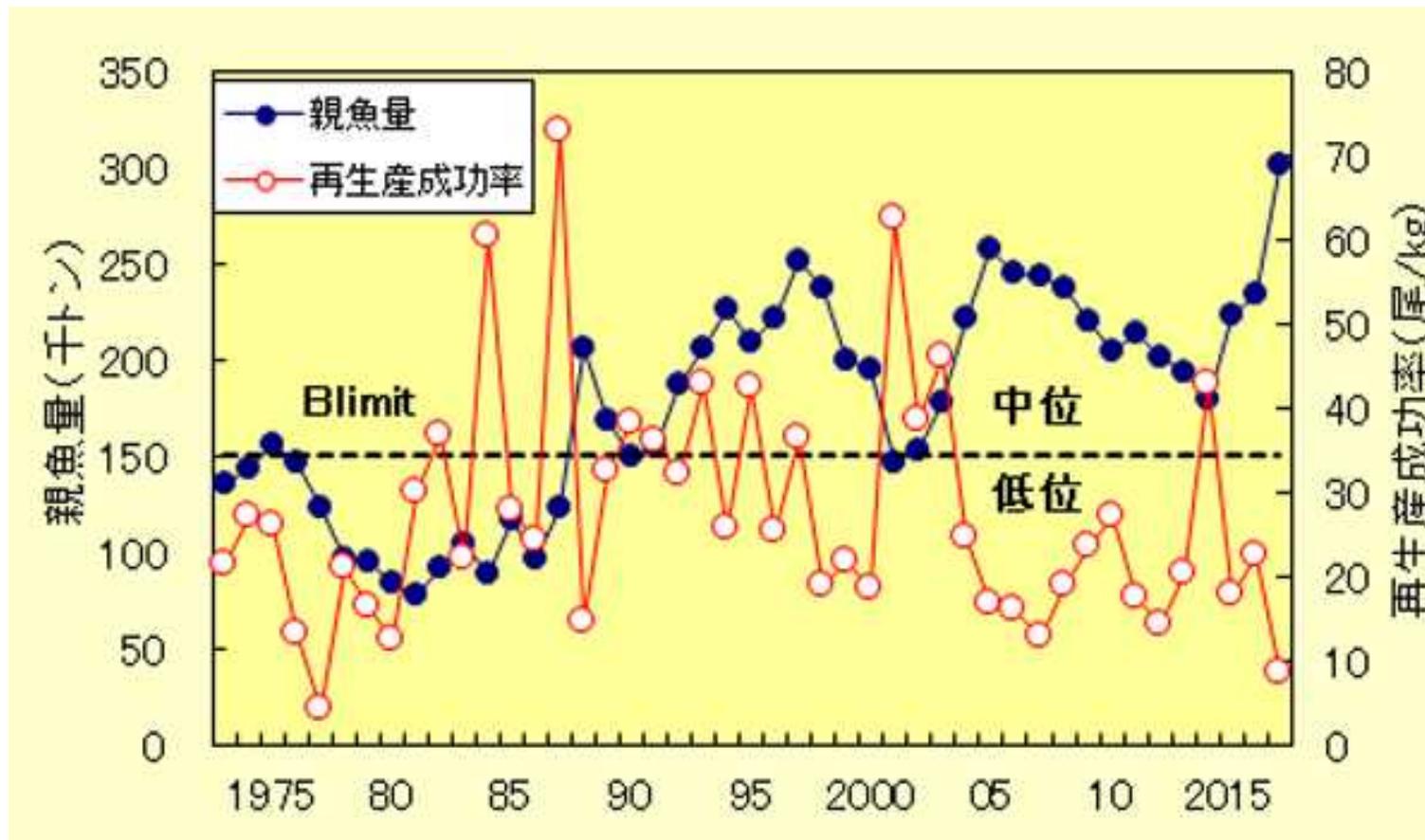
# 資源の動向(対馬暖流系群)①



※水準区分 低位／中位: Blimit(親魚量15万トン)、2017年の親魚量は30万トン  
中位／高位: 資源量を算出した1973年以降では高位水準と判断される年はない

- 資源量: 2017年は47万トン
- 資源水準: 「中位」
- 資源動向: 過去5年間の資源量の推移から「増加」
- 漁獲割合: 漁獲割合は2008年以降40%前後で推移していたが、2016、2017年は30%前後。

## 資源の動向(対馬暖流系群)②



- 親魚量： 2017年は30万トン
- Blimit： 2000年以降で高い加入があった最小の親魚量（15万トン）
- 2017年の親魚量は、Blimitを上回る。

## 資源評価のまとめ(対馬暖流系群)

- 資源量指標値を考慮したコホート解析により計算した。
- 資源量は、1970年代後半には低水準だったが、1980～1990年代前半にかけ増加して2005年以降は40万トン前後で経過している。2017年の資源量は47万トンと推定された。
- 2017年の親魚量は30万トンでBlimitを上回っていることから、資源水準は中位、過去5年間の資源量の推移から動向は増加と判断した。

# 2019年ABC表(対馬暖流系群)

資源量(2019)=698千トンを仮定、親魚量(2017)=301千トン、Blimit=150千トン

漁獲シナリオ (管理基準)	Target/Limit	2019年 ABC (千トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値 からの増 減%)	2024年の親魚量 (千トン) (80%区間)	確率評価(%)	
						2024年に 2017年 親魚量を維 持	2024年に Blimitを維持
現状の漁獲圧 の維持 (Fcurrent)	Target	135	19	0.31 (-20%)	939 (640~1,223)	100	100
	Limit	162	23	0.38 (±0%)	771 (505~1,002)	99	100
親魚量の増大 (F30%SPR)	Target	139	20	0.32 (-17%)	913 (627~1,180)	100	100
	Limit	166	24	0.40 (+4%)	745 (488~977)	99	100
親魚量の維持 (Fmed)	Target	198	28	0.50 (+30%)	579 (310~760)	91	100
	Limit	231	33	0.62 (+63%)	357 (171~511)	51	95